ソロ(正式名:スラカルタ)の摩天楼

2020年4月
石原勝巳氏の随筆を転記

ジョグジャカルタから東方に70キロに位置する古都である。嘗て（かつて）のマタラムの王都であり、王の居所であるマンクネガラン宮殿があり、ジャワ文化（特にバティック）の香るところである。現在はジョコ大統領の出身地として知られるところである。ソロ美人ということでも有名である。

小生はソロ美人ならぬジャワ原人博物館のあるサンギランに向かうため何十年振りかこの地を通過したのであるが、街中ではクラクションを鳴らしながらパトカーや警察車両がひっきりなしに警邏（けいら）していた。その原因はジョコ大統領の子息の結婚式が当該地で行われ、ジョコ大統領が出席されるということでこの疑問が解けた。結婚式（ウパチャラ・カウイン）の様子はテレビで一日中放映されていた。

それはともかく、この町にまさか見上げるような摩天楼があるとはいささか驚かされた。小生の乗車する車両がそのすぐ側を通過したのだ。あの建物は何だ。何十階建もあるホテル（目視によると名称：ホテル・アリラ）が屹立（きつりつ）している。印象では三十階はあると思った。たった一つしかないので余計にきわだって見える。

時代は変わったのだとつくづく思った。加えて、なんと様変わりするものだろうかとも思った。オレンジ色にすすけたような黒色が混じった藁と緑なす熱帯の樹木の織りなす配色（コントラスト）が印象的である景観が急激に変容しつつあるのだ。あまつさえ、携帯・スマホだって日本以上に普及していることには驚かされる。

そうだ、嘗て道路（ジャラン）もこんなに広く立派でなかったように思うが、現在ではアスファルト舗装の日本の道路と遜色はなくなっている。そのうえ、ジャワ各地で主要都市間の高速道路網が整備されつつある。その道路は自動二輪車や乗用車、トラックなどが所狭し状態で東西南北に激しく動き回っている。その中で特に印象に残っていることがある。路上パフォーマンスである。交差点（ラル・リントス）というのはその舞台となるのである。あまたの車両が信号待ちをしている時間帯をねらって僅かばかりの生活の糧を得ようと一群の老若男女がペットボトルなどの物や新聞を売りつけるために一斉に車めがけて来襲してくるのである。その中には哀れを誘う身体障害者もこれに加わったりしている。これらの光景だけは往時と変わらぬが、今回夜雨（よさめ）の中、民族衣装を着けて踊りを披露して金

集めをしている青年がいた。これには正直面くらった。失礼な言い方かもしれないが思わず笑ってしまった。当地の貧しきひとびとの生き様は当然のことながらその日を生きたためであるのだ。わずかばかりのカネが彼らの路上パフォーマンスを余儀なくさせているのだと思うと、他に現金収入を得る方法はないのだろうか。なにか複雑な気持ちにさせられてしまう。カネは本当に人間を幸せにするものだろうかという疑問を提起する意見がある。それを補強するかのように、今回の旅で目撃した一方で天を突くような摩天楼の存在と他方で路上パフォーマンスでしか生活の糧を得ることができない名もなき貧しき人々の存在が小生の脳裏にこびりついて離れないのである。

思うに、哲学者のデカルトはその著「方法序説」で、「良識（理性と同じもの）はこの世で最善の仕方で分配されている」というが、良識とカネとはかくも違い、最悪の仕方で分配されているのではないかと思わざるをえない。カネに良識や理性を持たせることは永久に絶対の不可能である。

（注）

警邏（けいら）： 警戒のため見回ること

屹立（きつりつ）： 高くそびえること